

# 邪なき言葉がつくる邪な世界

林奕含著／泉京鹿訳  
ファン・スリーチャー  
房思琪の初恋の樂園



四六判 274頁  
白水社  
[本体 2,000円 + 税]

濱田 麻矢

という形式をとっている。

『房思琪の初恋の樂園』（以下『房思琪』と記す）はその出版自体が一つの「事件」であった。出版後ほどなく、作者の林奕含（リン・イー・ハン）は二六歳で自ら命を絶った。彼女が小説のヒロイン房思琪同様に塾講師によって長い間性的虐待を受けていたことが大きく取り沙汰され、自死直前に行われたインタビューも注目を集めた。

まず本書のあらすじをまとめておこう。高雄の豪華なマンションに住む美少女房思琪は、同じマンションに住む塾講師の李国華（リー・クオ・ホァ）に作文を見てやると誘われ、あつという間に彼の性欲の餌食となった。性に関して保守的な両親には相談できず、李国華に憧れていた幼馴染の劉怡婷（リウ・イー・ティン）にも言い出せない。思琪と怡婷が台北の高校に進学したあとも関係は継続し、最終的に彼女は精神を病む。物語は、思琪が正気を失ったあと、部屋に残された彼女の手記を怡婷が発見し、読み進めていく

思琪は李先生との関係に苦しむうち、「私は彼を愛している、愛さなければならぬ」という強迫観念を持つようになる。そこに「愛」があるのだと自分に言い聞かせなければ、あつという間に精神が均衡を失ってしまうからだ。林奕含は生前のインタビューで、この小説は「誘惑された、あるいは強姦された女の子の物語」ではなく、「強姦犯を愛した女の子の物語だと言いたい、ここには〈愛〉という字があるのです」と訴えている。強姦犯を愛するとはいったいどういうことだろうか。複数の少女に性的虐待を繰り返す塾講師、李国華について、彼女は「現実の生活にモデルがいるわけですが、それは私が知っている先生でした。けれど、この実在のモデルにはさらにモデルがいると察した人もいるでしょう。そしてそのモデルとは

胡蘭成だと悟った人もいるでしょう……李国華とは胡蘭成に縮小をかけ、さらに縮小をかけた偽物なのです。そして李国華の原型の原型こそが胡蘭成なのです」と述べている。

張愛玲に心酔していたという林奕含が、「先生」を張愛玲の前夫胡蘭成に重ねたのは必然だったと言えるかもしれない。作家張愛玲と政論家胡蘭成結婚についてここで詳述する余裕はないが、類い稀な文才を持つ張愛玲が、一夫多妻的指向を隠そうとしなかった胡蘭成に翻弄され、苦悩していたのは確かである。ただここでは、房思琪が李国華を愛していると思ひ込むことになったのも、胡蘭成と張愛玲を結びつけたのも、「文学」なのだということを強調しておきたい。李国華は古今東西の文学に精通したインテリであり、思琪は文学にとりつかれた少女だった。林奕含インタビューを続けて聞いてみよう。「私たちは皆、「心」に在るを志と為し、言に発するを詩と為す」、「詩は情に縁りて綺麗なり」、そして孔子の言うところの「詩三百、一言で以てこれを蔽ひて曰へば、思い邪無し」という言葉を知っています。なのに胡蘭成や李国華、なぜ彼らは……。皆知っています、人が詩を詠むとき、人が愛の詩を作るとき、人が愛の言葉を語るとき、そこには真心があり、「志」があり、「情」があり、「思い邪無し」であるべきだということ。だからこの物語全体の中でもっとも私を苦し

めるのは、心から中国文学を信じている人が、どうしてこの雄大な五〇〇〇年の文脈を、雄大な五〇〇〇年の伝統を裏切ることができたのか、ということなのです。李国華の幾つかの言葉、彼が言うところの愛の言葉について、読者は彼がいわゆる犯罪者だとわかっているのでおぞましいと思うことでしよう。けれど彼の言葉は、もしもそれだけを取り出して読んでみれば、実はとても美しいということがわかるはずです。」

思琪が先生を愛そうと考えるのは、先生の言葉が「本当に美しい」からだだが、「美しい文学」と「嗜虐的な性欲」が李国華の中に同居しているために、彼女は混乱し、苦悩する。「二人の間にあるのは愛だ」と思い込んでいる限り、少女はつかの間の幸せ（初恋の樂園）を享受することができるが、「これは性暴力だ」と告発すると手酷い懲罰を食らうことになるのだ。事実、思琪以前に李国華から性的に搾取されていた少女郭曉奇は、ネット上で李国華を告発したために却って激しいバッシングを浴びる。自分が性暴力を振るってきた少女に初めて反撃されたために激怒した李国華は、思琪の性的な写真を使って郭曉奇を脅し、黙らせようとするのだが、「蟹のように」緊縛されていくうち、その衝撃に耐えられず思琪は正気を失ってしまふのである。

この凄惨な性暴力が始まる直前まで、思琪は自分をベッド

へ誘う「先生」を「溫柔敦厚なるは詩の教えなり」（『礼記』）、「我に投ずるに木瓜を以てす」（『詩経』）と「邪無き」詩文を用いて形容し、痛ましいほどに自分を納得させようとする。

このように、文学という絆によって彼女が先生を「愛した」とするならば、文学こそが彼女を害したのに他ならぬ。「蟹」にされた思琪の精神が壊れた後、親友の怡婷は、自分たちを裏切ったのは文学を学んだ「人間」などではなく「文学」そのものなのだ、と悟っている。さらに最後の場面では、思琪や怡婷、李国華と同じマンションの住人たちが、思琪の精神が崩壊したのは「本の読みすぎ」だろうと噂話をし、それを聞いた李国華は悼むような表情でうなずくのだ。このとき、著名な教育者が少女を繰り返しレイプしたという事件は「本を読みすぎた」少女が常識の世界から逸脱して正気を失ったという自業自得の物語にすりかえられてしまったのである。本書は、このようにして社会は性的暴力の被害者の声を葬り去ってきたし、これからも葬り去っていくのだからという暗い予感に貫かれている。

ここで前述のインタビュアー「李国華にはモデルとなった実在の人物がおり、そしてその実在の人物のモデルは胡蘭成なのです」という言葉を振り返ってみると、おのずからそれと対をなす人物像——「房思琪にはモデルとなった実在の人物

（林奕含）がおり、そのモデルは張愛玲である」——が浮かび上がってくる。林奕含インタビュアーは、「どんなに胡蘭成という人物が下劣だったとしても、彼の『民国女子』が張愛玲を描いた一番美しい文章であることに違いはない」と断言している。下劣な男性の美しい言葉を媒介として、『房思琪』全篇のあちこちに張愛玲の影が見えるのは、決して偶然ではあるまい。小文では、『房思琪』と張愛玲の短篇「色、戒」の相似について少し触れておきたい。「色、戒」の主な舞台は淪陷期の上海。愛国大学生の王佳芝はその美貌と演技力を買われて国民党政府のスパイとなり、日本傀儡政権の重鎮である易先生を色仕掛けで籠絡した上で暗殺を図ろうとする。万事順調に進み、計画当日に佳芝は易を狙撃地点として選ばれた宝石店に連れて行った。しかし、ダイヤモンドの指輪を選んでいたその時、佳芝は易が「自分のことを愛している」という事実（かどうかはテキストからは読み取れないのだが）に愕然とし、易に「逃げて」と一言告げる。即座に状況を察した易は脱兎の如く店から飛び出して瞬時に市内を封鎖し、佳芝を含む暗殺団をその日のうちに銃殺してしまうのである。「色、戒」は『房思琪』のようなセクシャルハラセメントを描いた小説ではない。しかしながら、両者はどちらも「若い女性／権力を持つ男性と愛情に基づかない肉体関係を持ち／

やがてその関係が愛であると自分に言い聞かせることによつて／破滅してしまふ物語」だとまとめることができるだろう。そして明らかに、林奕含は『房思琪』に張愛玲テクスト、特に「色、戒」を血肉として溶かしこんでいる。

例えば、「色、戒」は易先生の妻が主催する麻雀の集いに暗殺作戦の使命を帯びた佳芝が参加する場面が始まり、その日の晩に佳芝が銃殺された後、易先生がまだ麻雀に精を出している妻たちに軽口を叩かれるところで終わっている。その朝、目を射るように真っ白なクロスが敷かれた雀卓で牌をかき混ぜていた佳芝が消えてしまったことには何の注意も払われないままで。一方『房思琪』の物語も、高級マンションの住人の会合に始まり、最後の場面では先に述べた通り住人たちが食事をしながら「思琪は本の読みすぎでおかしくなったのだ」と噂話をするところで終わっている。彼らの目の前のテーブルには「色、戒」と同じくシーツのように白いクロスが敷かれているのだが、そこに赤ワインがこぼれて血のようなシミが広がるのも、佳肴として蟹が並べられるのも、思琪の悲劇を示唆するものだろう。しかしこうした情景とは裏腹に、食卓を飛び交う空疎な会話からは、蟹のように緊縛されて世界の裏側に追い詰められた少女のことなど誰も気にかけていないということがうかがえる。

二作に共通する視点のずらし方は、読者がヒロインに感情

移入するのを妨げるのと同時に、性暴力への世間の無関心を冷静に見据えている。どちらのヒロインも、「愛」の名のもとに性的に絡め取られ、未来を奪われた。いくら文学を愛そうとも、高等教育を受けようとも、少女たちが精神と身体を自分自身で掌ることが当たり前の世にならない限り、同じことは繰り返して起きるだろう。

『房思琪』は、術学的と言いたくなるほどに古今東西の間テクストが埋め込まれ、叙事角度や叙事時間がしばしば突然切り替わる大変難解なテクストである。これを読みやすい日本語テクストに仕上げた翻訳も素晴らしかった。必要最小限に抑えられた注が見開きページの左についているのも読者にとっては親切でありがたい。

一点、翻訳版を読んでやや意外に思ったのは、思琪が李國華と話すときに「ですます」調を用いず、女性的な言葉遣い（いわゆる役割語）もほとんど使わないところだった。評者が原作を読んだ印象では、思琪は口数少なく先生を「立てる」タイプの女学生だったのだが、泉訳からはぶつきらぼうとも言える話し方をする、先生に服従するだけではない少女像が立ち上がってくる。新たな言語の器によつて、原テクストのもつ別の可能性に気づくことができるのも、翻訳を読む喜びの一つと言えるだろう。

（はまだ・まや 神戸大学）